大きな楠がシンボルの帯山西小学校。あいさつ運動が盛んで、その活動自体が地域の防犯活動にもなっている

## 託麻原に戦後生まれた新しいまち

**帯山西**小学校が、帯山小学校のマンモス化に伴って分離新設されたのは昭和54年4月のこと。まちそのものも戦後に新しく誕生した住宅地が中心で、その昔は託麻原と呼ばれる原野だったそうです。託麻原の丘陵地帯には帯のように連なる雑木林があり、その間に畑が点在するのどかな村でした。「帯山」という地名も、そんなところからきていると言われています。

そのためか、校区内には神社やお寺はなく、学校などの教育機関以外の建物は、病院や会社の事務所が中心になっています。そのせいもあって、犯罪や交通事故がほとんどないという静かで住みやすいまちです。帯山西校区は、子育て世帯にとっては魅力のあるまちの一つです。

## 地域の熱意で誕生した『帯西むらさき公園』

**そんな**静かなまちにも一つ悩みがありました。災害などが発生した時に、多くの人たちが一時的に避難する広い場所が少ないということです。帯山西校区自治協議会の鈴木之夫会長は次のように言います。「公園の設置は防災のためにもぜひ必要だと考え、熊本市に陳情を重ねてきました。公園設置に向けて地域の人たちで、ワークショップを重ね、多くの方々の意見を集め、検討を重ねて実現を願ってきました。こうして、平成24年に誕生した公園が『帯西むらさき公園』です。公園名に使われている『むらさき』は、古来から紫色の染料として使われてきた植物のこと。その昔、託麻原に多く自生していたと言われています。そのため、帯山西小学校の校歌には『たくまのに生ふる紫　匂ふごと　開けゆくまち』と歌われており、公園名となりました」。こうして地域の防災への意識の高まりが、公園の誕生に結びつき、帯山西校区に新しい歴史を刻むことになりました。

鈴木さんは「今でこそ、5つの町内が協調と融和を第一に、なにごともまとまりがあるのが自慢ですが、かつては神社やお寺がないために、伝統的な祭りが少なく、地域がまとまる機会が少なかったのも事実です。そのために、防犯面からは、まず地域の人たちがお互いに顔見知りになることが大事だとして、帯山西小学校を中心に『あいさつ運動』に積極的に取り組んできました。地道な活動が犯罪抑制に効果を発揮し、『治安のよい校区』との自信を持てるようになりました」と話します。

丘陵地帯にある帯山西校区。新しいまちであることは、住民同士のつながりを強くしている要因でもある

「ほっと」でつながる おびやまにし 帯山西 校区

# みんなの熱意がつくった公園と「つながり」

住民の強い要望で作られた「帯西むらさき公園」。地域の憩いの場として、住民のまちづくり活動の拠点として、これからの活用が期待される